

秋山図

芥川龍之介

青空文庫

「——黄大癡こうたいちといえ、大癡ちの秋山しゅうざん図ずをご覧らんになつたことが
ありますか？」

ある秋よの夜よ、甌香閣おうこうかくをたず訪たずねた王石谷おうせきこくは、主人うなんのなん憚南田でんと
茶すずを啜すずりながら、話わのついでにこんな問とを発した。

「いや、見たことありません。あなたはご覧らんになつたのですか
？」

大癡老人こうこうぼう黄公望わうこうぼうは、梅道人ばいどうじんや黄鶴山こうかくさんしやう樵しやうとともに、一元げんち
朝ようの画えの神手しんしゆである。憚南田わなんはこう言いいながら、かつて見た
沙磧させき図ずや富春ふうしゆん卷かんが、髣髴ほうふつと眼底がんに浮うぶような氣きがした。

「さあ、それが見たと言いつて好いいか、見みないといつて好いいか、不

思議なことになっているのですが、——」

「見たと言つて好いか、見ないと言つて好いか、——」

暉南田は訝いぶかしそうに、王石谷の顔へ眼めをやつた。

「模本もほんでもご覧になったのですか？」

「いや、模本を見たのでもないのです。とにかく真蹟しんせきは見たの

ですが、——それも私わたしばかりではありません。この秋山図のこと

については、煙客えんかく先生せんせい（王時敏おうじびん）や廉州れんしゅう先生せんせい（王鑑おうかん）

も、それぞれ因縁いんねんがおりなのです」

王石谷はまた茶を啜のちつた後、考かんが深えぶかそうに微笑した。

「ご退屈でなければ話しましょうか？」

「どうぞ」

惲南田は銅鑿どうけいの火を掻き立ててから、慇懃いんぎんに客を促した。

*

*

*

元宰げんさい先生せんせい（董其昌とうきしょう）が在世ざいせい中ちゆうのことです。ある年の

秋先生は、煙客翁えんかくおうと画論をしている内に、ふと翁に、黄一峯こういつぽう

の秋山図を見たかと尋ねました。翁はご承知のとおり画事の上では、大癡そちを宗そうとしていた人です。ですから大癡の画という画はいやしくも人間じんかんにある限り、看尽みつくしたと言つてもかまいません。

が、その秋山図という画ばかりは、ついに見たことがないのです。

「いや、見るどころか、名を聞いたこともないくらいです」

煙客翁はそう答えながら、妙に恥はずかしいような気がしたそうです。

「では機会のあり次第、ぜひ一度は見ておおきなさい。夏山かざんず図や浮嵐ふらんず図に比べると、また一段と出しゅつ色しよくの作です。おそらく大癡いちち老人の諸本の中でも、白眉はくびではないかと思えますよ」

「そんな傑作ですか？ それはぜひ見たいものですが、いったい誰が持っているのです？」

「潤州じゆんしゆうの張氏ちやうしの家にあるのです。金山寺きんざんじへでも行った時に、門たを叩たたいてご覧らんなさい。私わたしが紹介状を書いて上げます」

煙客翁えんかくおうは先生の手簡てもらを貰うと、すぐに潤州へ出かけて行きました。何しろそういう妙画を蔵している家ですから、そこへ行けば黄一峯こういつぽうの外ほかにも、まだいろいろ歴代の墨ぼくみよう妙を見ること

できるに違いない。——こう思った煙客翁は、もう一刻も西園さいえんの書房に、じつとしてしていることはできないような、落着かない気もちになっていたのです。

ところが潤州へ来て観みると、楽みにしていた張氏の家というのは、なるほど構えは広そうですが、いかにも荒れ果てているので、かき牆には蔦が絡からんでいるし、庭には草が茂っている。その中ににわとあひる鶏や家鴨などが、客の来たのを珍しそうに眺めているという始末です。ですから、さすがの翁もこんな家に、大癡の名画があるのだろうか、と、一時は元げん宰さい先せん生せいの言葉が疑うたがいたくなつたくらいでした。しかしわざわざ尋ねて来ながら、刺しも通ぜずに帰るのは、もちろん本望ほんもうではありません。そこで取次しよぎうしに出て来た小厮しょうしに、と

もかくも黄一峯の秋山図を拝見したいという、遠来の意を伝えた後、のち思白先生しはくが書いてくれた紹介状を渡しました。

すると間もなく煙客翁は、ちようどう庁堂へ案内されました。ここも

紫檀したんの椅子いす机が、清らかに並べてありながら、冷たい埃ほこりの臭いが

する、——やはり荒こうはい廢はいの気が鋪ほせん瓢ひょうの上に、漂つているとでも言

いそうなのです。しかし幸い出て来た主人は、病弱らしい顔はし

ていても、人からの悪い人ではありません。いや、むしろその蒼あ

白い顔や華きやしや奢しゃな手の恰好なぞに、貴族らしい品格が見えるよ

うな人物なのです。翁はこの主人とひととおり、初対面あいさつの挨拶

をすませると、早速名高い黄一峯を見せていただきたいと言いだ

しました。何でも翁の話では、その名画がどういう訳か、今の内

に急いで見ておかないと、霧のように消えてでもしまひそうな、迷信じみた気もちがしたのだそうです。

主人はすぐに快諾かいだくしました。そうしてその庁堂ていどうの素壁そへきへ、一幀いつしやうの画幅がふくを懸かけさせました。

「これがお望みの秋山図です」

煙客翁えんかくおうはその画えを一目見ると、思わず驚きようたん嘆たんの声を洩あらしました。

画は青せいりよく緑りよくの設色せつしよくです。溪たにの水が委蛇いはいと流れたところに、

村落しやうきやうや小橋せうきやうが散在さんざいしている、——その上に起した主峯しゆほうの腹に

は、ゆうゆうとした秋の雲が、蛤粉ごふんの濃淡のうたんを重ねています。山は

高房山こうぼうざんの横点おうてんを重ねた、新雨しんうを経たような翠黛すいたいですが、そ

れがまたしゆを点じた、所々の叢林そうりんの紅葉こうようと映発している美しきは、ほとんど何と形容して好いいか、言葉の着けようさえありません。こういうとただ華麗かれいな画のようですが、布置ふちも雄大を尽つしていれば、筆墨ひつぼくも渾厚こんこうを極きわめている、——いわば爛然らんぜんとした色彩うちの中に、空靈くうれい澹蕩たんとうの古趣おのずかみなきが自ら漲なっているような画なのです。

煙客翁はまるで放心したように、いつまでもこの画を見入っていました。が、画は見ていければ見ているほど、ますます神妙を加えて行きます。

「いかがです？ お気に入りましたか？」

主人は微笑を含みながら、斜ななめに翁の顔を眺めました。

「神品しんぴんです。元宰げんさい先生せんせいの絶賞は、たとい及ばないことがあ

っても、過ぎているとは言われません。実際この図に比べれば、

私わたしが今までに見た諸名本は、ことごとく下風かふうにあるくらいです」

煙客翁はこういう間あいだでも、秋山しゅうざん図から眼を放しませんでした。

「そうですか？ ほんとうにそんな傑作ですか？」

翁は思わず主人のほうへ、驚いた眼を転じました。

「なぜまたそれがご不審なのです？」

「いや、別に不審という訳ではないのですが、実は、——」

主人はほとんど処子しよしのように、当惑そうな顔を赤めました。が、

やつと寂しい微笑を洩すと、おずおず壁上の名画を見ながら、こ

う言葉が続けるのです。

「実はあの画を眺めるたびに、私は何だか眼を明いたまま、夢でも見ているような気がするのです。なるほど秋山しゅうざんは美しい。しかしその美しさは、私だけに見える美しさではないか？ 私以外の人間には、平凡な画がと図に過ぎないのではないか？——なぜかそういう疑いが、始終私を悩ませるのです。これは私の気の迷いか、あるいはあの画が世の中にあるには、あまり美し過ぎるからか、どちらが原因だかわかりません。が、とにかく妙な気がしますから、ついあなたのご賞讃にも、念を押すようなことになったのです」

しかしその時の煙客翁は、こういう主人の弁解にも、格別心は止めなかつたそうです。それは何も秋山図に、見惚みとれていたばかり

りではありません。翁には主人が徹頭徹尾、鑑識に疎いのを隠したさに、胡乱の言を並べるとしか、受け取れなかつたからなのです。

翁はそれからしばらくの後、この廃宅同様な張氏の家を辞しました。

が、どうしても忘れられないのは、あの眼も覚めるような秋山図です。実際大癡の法燈を継いだ煙客翁の身になって見れば、何を捨ててもあれだけは、手に入れたいと思つたでしよう。のみならず翁は蒐集家です。しかし家蔵の墨妙の中でも、黄金二十鎰に換えたという、李宮丘の山陰泛雪図でさえ、秋山図の神趣に比べると、遜色のあるのを免れません。ですか

ら翁は蒐集家としても、この稀代きだいの黄一峯こういつぽうが欲しくてたまらなくなつたのです。

そこで潤州じゆんしゆうにいる間あいだに、翁は人を張氏つかに遣わして、秋山図

を譲ってもらいたいと、何度も交渉してみました。が、張氏はどうしても、翁の相談に応じません。あの顔色かおいろの蒼白あおしろい主人は、

使に立つたものの話によると、「それほどこの画がお気に入つたのなら、喜んで先生にお貸し申そう。しかし手離すことだけは、ごめん蒙こうむりたい」と言つたそうです。それがまた氣を負つた煙客翁には、多少癩かんにも障さわりました。何、今貸してもらわなくても、いつかはきつと手に入れてみせる。——翁はそう心に期ごしながら、とうとう秋山図を残したなり、潤州を去ることになりました。

それからまた一年ばかりの後のち、煙客翁は潤州へ来たついでに、張氏の家を訪れてみました。すると墻かきに絡からんだ蔦つたや庭に茂った草の色は、以前とさらに変わりません。が、取次ぎの小しょうし廝しに聞けば、主人は不在だということです。翁は主人に会わないにしろ、もう一度あの秋山図を見せてもらおうように頼みました。しかし何度頼んでみても、小廝は主人の留守るすを楯たてに、頑がんとして奥へ通しません。いや、しまいには門を鎖とぎしたまま、返事さえろくにしないのです。そこで翁はやむを得ず、この荒れ果てた家のどこかに、蔵している名画を想いながら、惆ちゆう悵ちやうと独ひとり帰かへつて来きました。

ところがその後元ごげんさい宰さい先生せんせいに会あうと、先生は翁ちゆうしに張ちゆうし氏しの家うちには、大癡だいぢの秋山図しゆせんずがあるばかりか、沈しんせきでん石田うやししゆくずの雨夜止宿うやししゆくず図ずや自じ寿じう

図ゆずのような傑作も、残っているということをご報告しました。

「前にお話するのを忘れたが、この二つは秋山図同様、※苑かいえんの奇観とも言うべき作です。もう一度私が手紙を書くから、ぜひこれも見ておおきなさい」

煙客翁はすぐに張氏の家へ、急の使を立てました。使は元宰先生の手札しゆさつの外ほかにも、それらの名画あがなを購たうべき橐たく金きんを授けられていたのです。しかし張氏は前のお通り、どうしても黄こう一いつ峯ぼうだけには、手離がえんすことを肯かじません。翁はついに秋山図しゅうざんずには意を絶つより外ほかはなくなりました。

*

*

*

おうせきこく
 王石谷はちよいと口を噤んだ。

「これまでは私が煙客先生から、聞かせられた話なのです」

「では煙客先生だけは、たしかに秋山図を見られたのですか？」

うんなんてん
 憚南田は髯を撫しながら、念を押すように王石谷を見た。

「先生は見たと言われるのです。が、たしかに見られたのかどうか、それは誰にもわかりません」

「しかしお話の容子では、——」

「まあ先をお聴きください。しまいまでお聴きくだされば、また
 おのちだし
 自ら私とは違つたお考が出るかもしれませぬ」

王石谷は今度は茶も啜らずに、
 すす
 びび
 々と話を続けだした。

*

*

*

煙客翁が私わたしにこの話を聴かせたのは、始めて秋山図を見た時から、すでに五十年近い星霜せいそうを経過した後のちだったので。その時は元宰げんさい先生も、とうに物故ぶつこしてしまいましたし、張氏ちやうしの家でもいつの間まにか、三度まで代が變つていました。ですからあの秋山図も、今は誰の家に蔵されているか、いや、未いまだに亀玉きぎよくの毀れやぶもなにか、それさえ我々にはわかりません。煙客翁は手にとるように、秋山図の靈妙を話してから、残念そうにこう言つたものです。

「あの黄一峯は公孫こうそん大嬢たいじやうの劍器けんきのようなものでしたよ。筆墨

はあつても、筆墨は見えない。ただ何とも言えない神気が、ただちに心に迫つて来るのです。——ちようど龍翔の看はあつても、人や劍が我々に見えないのと同じことですよ」

それから一月ばかりの後、そろそろ春風が動きだしたのを潮に、私は独り南方へ、旅をすることになりました。そこで翁にその話をするると、

「ではちようど好い機会だから、秋山を尋ねてご覧なさい。あれがもう一度世に出れば、画苑の慶事ですよ」と言うのです。私ももちろん望むところですから、早速翁を煩わせて、手紙を一本書いてもらいました。が、さて遊歴の途に上つてみると、何かと行く所も多いものですから、容易に潤州の張氏の家を

訪れる暇ひまがありません。私は翁の書を袖そでにしたなり、とうとう子ほ

ととぎす

規なが啼なくようになるまで、秋しゅうざん山を尋ねずにしまいました。

その内にふと耳にはいったのは、貴戚きせきの王氏おうしが秋山図を手に入

れたという噂うわさです。そういえば私わたしが遊歴中、煙客翁えんかくおうの書を見せ

た人には、王氏を知っているものも交まじっていました。王氏はそう

いう人からでも、あの秋山図が、張氏ちやうしの家に蔵してあることを

知ったのでしよう。何でも坊間ぼうかんの説によれば、張氏の孫は王氏おうし

の使を受けると、伝家の彝鼎いいていや法書とともに、すぐさま大癡たいちの秋

山図を献じに来たとかいうことです。そうして王氏は喜びのあま

り、張氏の孫を上座に招じて、家姫かきを出したり、音楽を奏したり、

盛きようえんな饗えん宴えんを催したあげく、千金しんを寿じゆにしたとかいうことです。

私はほとんど雀躍じゃくやくしました。滄桑五十載そうそうごじっさいを閲けみした後のちでも、秋山凶はやはり無事だったのです。のみならず私も面識がある、王氏の手中に入ったのです。昔は煙客翁がいくら苦心をしても、この凶を再び看みることは、鬼神きしんが悪にくむのかと思うくらい、ことごとく失敗に終わりました。が、今は王氏の焦慮しやうりよも待たず、自然とこの凶が我々の前へ、蜃楼しんろうのように現れたのです。これこそ實際天縁が、熟したと言う外ほかはありません。私は取る物も取りあえず、金きん きんしようにある王氏の第宅ていたくへ、秋山を見に出かけて行き
ました。

今でもはつきり覚えていますが、それは王氏の庭の牡丹ぼたんが、玉ぎ欄よくらん そとの外そとに咲き誇った、風のない初夏ひるすの午過ぎです。私は王氏

の顔を見ると、揖ゆうもすますかすまさない内に、思わず笑いだしてしまいました。

「もう秋山図はこちらの物です。煙客先生もあの図では、ずいぶん苦勞をされたものですが、今度こそはご安心なさるでしょう。そう思うだけでも愉快です」

王氏も得意満面でした。

「今日は煙客先生や廉れん州しゅう先生も来られるはずですよ。が、まあ、お出でになった順に、あなたから見てもらいましょう」

王氏は早速かたわらの壁に、あの秋山図を懸かけさせました。水に臨んだ紅葉こうようの村、谷を埋うずめている白雲はくうんの群むれ、それから遠おちこ近ちに側立そばだった、屏風びょうぶのような数峯すうそうの青せい、——たちまち私の眼

の前には、大癡老人が造りだした、天地よりもさらに靈妙な小天
 地が浮び上つたのです。私は胸を躍おどらせながら、じつと壁上の画
 を眺めました。

この雲煙うんえん邱壑きゆうがくは、紛まぎれもない黄一峯こういつぼうです、癡翁ちおうを除いて
 は何なんびと人も、これほど皴しゆんてん点を加えながら、しかも墨いを活かす
 ことは——これほど設せつ色しよくを重くしながら、しかも筆が隠いれな
 いことは、できないのに違いありません。しかし——しかしこの
 秋山図は、昔一たび煙客翁が張氏しやうしの家に見たという図と、たしか
 に別な黄一峯こういつぼうです。そうしてその秋山図しゆうざんずよりも、おそらくは
 下位にある黄一峯こういつぼうです。

わたし私の周囲には王氏を始め、座にい合せた食しよつかく客かくたちが、私の

顔色かおいろを窺うかがっていました。ですから私は失望の色が、寸分すんぶんも顔へ露あらわれないように、氣を使う必要があつたのです。が、いくら努めてみても、どこか不服な表情が、我知らず外へ出たのでしよう。王氏はしばらくたつてから、心配そうに私へ声をかけました。「どうです?」

私は言下ごんかに答えました。

「神品です。なるほどこれでは煙客えんかく先生が、驚倒きやうとうされたのも不思議はありません」

王氏はやや顔色を直しました。が、それでもまだ眉まゆの間には、いくぶんか私の賞讚しょうさんに、不満らしい気色けしきが見えたものです。

そこへちようど来合せたのは、私に秋山の神趣を説いた、あの

煙客先生です。翁は王氏に会えしやく釈やくをする間まも、嬉しそうな微笑を浮べていました。

「五十年前ぜんに秋山図を見たのは、荒れ果てた張氏の家でしたが、今日きようはまたこういう富貴ふうきのお宅に、再びこの図とめぐり合いました。まことに意外な因縁いんげんです」

煙客翁はこう言いながら、壁上の大癡たいちを仰ぎ見ました。この秋山がかつて翁の見た秋山かどうか、それはもちろん誰よりも翁自身みづかみが明らかに知っているはずです。ですから私も王氏同様、翁がこの図を眺める容子ようすに、注意深い眼を注いでいました。すると果然ぜん翁んの顔も、みるみる曇くもつたではありませんか。

しばらく沈黙が続いた後のち、王氏はいよいよ不安そうに、おずお

ず翁へ声をかけました。

「どうです？　今も石谷先生は、たいそう褒めてくれましたが、

——」

私は正直な煙客翁が、有体な返事をしはしないかと、内心冷や冷やしていました。しかし王氏を失望させるのは、さすがに翁も気の毒だったのでしよう。翁は秋山を見終ると、叮嚀に王氏へ答えました。

「これがお手にはいったのは、あなたのご運が好いのです。ご家蔵の諸宝もこの後は、一段と光彩を添えることでしょう」

しかし王氏はこの言葉を聞いても、やはり顔の憂色が、ますます深くなるばかりです。

その時もし廉州れんしゅう先生が、遅れ馳せおくばにでも来なかつたなら、我々はさらに気まずい思いをさせられたに違いありません。しかし先生は幸いにも、煙客翁の賞讃が洩りがちになった時、快活に一座へ加わりました。

「これがお話の秋山図ですか？」

先生は無造作な挨拶むぞうさ あいさつをしてから、黄一峯こういつぼうの画えに対しました。そうしてしばらくは黙然もくねんと、口髭くちひげばかり嚙かんでいました。

「煙客先生えんかくせんせいは五十年前ぜんにも、一度この図をご覧になったそうです」

王氏はいつそう気づかわしそうに、こう説明を加えました。廉州れんしゅう先生はまだ翁から、一度も秋山しゅうざんの神逸しんいつを聞かされた

ことがなかつたのです。

「どうでしょう？ あなたの鑑裁は」

先生は歎息を洩らしたぎり、不相変画を眺めていました。

「ご遠慮のないところを伺いたいのですが、——」

王氏は無理に微笑しながら、再び先生を促しました。

「これですか？ これは——」

廉州先生はまた口を噤みました。

「これは？」

「これは癡翁第一の名作でしょう。——この雲煙の濃淡をご覧な

さい。元氣淋漓じゃありませんか。林木なぞの設色も、まさ

に天造とも称すべきものです。あすこに遠峯が一つ見えましよ

う。全体の布局ふきよくがあのため、どのくらい活いきているかわかりません」

今まで黙もくっていた廉州先生は、王氏のほうを顧かえりみると、いちいち画かの佳所かしよを指さしながら、盛さかんに感歎かんとんの声を挙あげ始めました。その言葉とともに王氏の顔が、だんだん晴はれやかになりだしたのは、申し上げるまでもありますまい。

私はその間あいだに煙客翁と、ひそかに顔を見合あわせました。

「先生、これがあの秋山図ですか？」

私が小声ささやにこう言うと、煙客翁は頭を振りながら、妙まばたな瞬まきを一つしました。

「まるで万事が夢のようです。ことによるとあの張家ちやうけの主人は、

狐仙こせんか何かだったかもしれませんが

*

*

*

「秋山図の話はこれだけです」

王石谷おうせきこくは語り終ると、おもむろに一碗の茶を啜すすった。

「なるほど、不思議な話です」

憚南田うんなんでんは、さつきから銅鑿どうけいの焰ほのおを眺めていた。

「その後ご王氏も熱心に、いろいろ尋ねてみたそうですが、やはり癡翁の秋山図と言えば、あれ以外に張氏も知らなかったそうです。ですから昔煙客先生が見られたという秋山図は、今でもどこかに

隠れているか、あるいはそれが先生の記憶の間違いに過ぎないのか、どちらとも私にはわかりません。まさか先生が張氏の家へ、秋山図を見に行かれたことが、全体幻まぼろしでもありませんまいし、――」

「しかし煙客えんかく先生せんせいの心うちの中には、その怪しい秋山図が、はっきり残っているのです。それからあなたの心なかの中にも、――」

「山石の青緑だの紅葉しゆの色いろだのは、今でもありあり見えるよ
うです」

「では秋山図がないにしても、憾うらむところはないではありませんか？」

暉王うんおうの両大家たなごころうは、掌てのひらを拊うつて一笑した。

青空文庫情報

底本：「日本文学全集28芥川龍之介集」集英社

1972（昭和47）年9月8日発行

入力：j.utiyama

校正：もりみつじゅんじ

1999年5月15日公開

2009年9月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

秋山図

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>